

避難所で泊まってみよう!!

親子ぼうさい生活体験塾

- ★開催日時：平成29年9月9日（土）午後2時から（午後1時30分 受付開始）
9月10日（日）午前10時まで（1泊2日）《日帰り参加可能》
- ★会場：立野台小学校 体育館（座間市避難所）



2016年4月 熊本地震益城町避難所

親子+家族で防災・生活などについて災害を考えるワークショップ+減災体験学習をしませんか？

地震災害などで、家がつぶれた、焼かれた、または一人で生活することができない人は、避難所で生活することになるかもしれません。避難所生活ってどのようなもの？

体育館で宿泊体験をしながら、近所の皆さんと一緒に「避難所」のことについて考えてみませんか？ 日帰り参加歓迎（午後7時まで）

- ★対象者：立野台・入谷・緑が丘・栗原地区にお住いの親子・家族の方々の他、市内で避難所に関心をお持ちの方、障がいのある方も参加してください。避難所運営委員、自治会・自主防災会関係者、PTAの関係の方、子供会、民生児童委員、青少年指導員、保育園・幼稚園関係者、介護事業者、福祉ボランティアの方など・・・大勢の参加をお待ちします。
- ★持ち物：寝具類（寝袋・毛布・床敷物）体育館上履き、枕になるもの、洗面用具、マイカップ、食器、水筒、筆記用具、着替え、常備薬、懐中電灯、防虫剤など。（名前を忘れずに）
1日目の夜の災害食（夕食は出ません）自宅で備蓄している食べ物を持参してください。
但し、お湯は提供します。コンビニへの買い出しは禁止です。
- ★参加費：一家族 500円（家庭用の備蓄用に「非常用炊出袋」を1パックを配布します）
参加費は、非常用炊出袋・食材費・運営費・資料代などに使います。

申し込み先：ざま災害ボランティアネットワーク（ZSVN）事務局

参加を希望される方は、9月5日（火）までにMAILまたはFAXで裏面の申込書に所定事項を記入しお申し込みください。各種の準備の都合がありますので必ず事前申込でお願いします。申し込み先FAX、メルアドについては裏面をご覧ください。

《注意事項》

- ★小雨の場合は実施します。
- ★荒天などで中止の連絡は、午前9時の状況を見て判断します。「ざま災害ボランティアネットワーク HP」及びFacebookで連絡します。会場の学校に問い合わせても休日ですので誰もおりません。

主催：ざま災害ボランティアネットワーク（ZSVN）

共催：立野台小学校避難所運営委員会

後援：座間市教育委員会・座間市危機管理課・座間市社会福祉協議会



事前申し込みが必要です。

「親子防災・生活体験塾＋避難所宿泊体験」参加申込書

E-mail : zsvn_info@yahoo.co.jp

FAX 046-257-8827 (宮本)

FAX 046-255-0266 (濱田)

番号を間違えないで
ください。

氏名	年齢	電話番号	住所・団体名(番地不要) : 区分に○
			宿泊・日帰り

★申し込みにご記入いただく個人情報はこの企画に限って連絡用のみに使用します。使用后、破棄します。

《会場案内図》

災害を想定して出来るだけ徒歩または、自転車で参加してください。駐車場はありません。

体験塾って…どんなことをするのか？

親子防災・生活体験塾＋避難所宿泊体験は、体育館に避難されたみなさんと災害に関する学習・体験・ワークショップをします。

- ★避難所ってどのような場所なのか考え準備しよう。
- ★災害ってどんな被害が出てどのように行動するか時間を追ってみんなで考えてみよう。
- ★災害が来る前に準備しておくこと、災害が来てしまったらどのように生き延びるか？そのための「わざ」を体験しよう。
今すぐに役立つ「わざ」がたくさんあります。
- ★災害の中で限られた水で、「非常用炊出袋」を使ってご飯を炊いて食べよう。
- ★子ども専用の楽しいプログラムもあります。



会場：立野台小学校
立野台1-1-3

《日帰り参加予定の方へ》

体育館で宿泊はできないが避難所のことを知っておきたいと思われる方の参加を歓迎します。
但し、午後7時までのプログラムを終了してからお帰りください。

《注意》 9月9日の夕食は提供しません。災害とはそのようなものです。参加者が日ごろから家で備蓄してある食糧を持って避難してきてください。(お湯は提供します)
コンビニへの買い出しは禁止します。

この企画は、近いうちにほぼ確実に首都圏を襲うとされています「首都直下地震(M7.3)」に備えるための体験塾です。災害直後イメージして参加してください。

座間市での想定揺れは「震度6クラス」です。あっては欲しくない「災害」ですが私たちは生き残らなければなりません。そのためには、何よりも災害というものを「自分のこと」としてイメージして的確な行動ができる必要があります。時間帯によっては世帯主が帰ってこないこともあります。平時から、そのような時にいかにして「いのち」を「守って生き残り」さらに、「生き延び」るかを考えておく必要があります。

どうか、災害をイメージするための訓練として家族・近隣で声を掛け合って参加してみてください。